

『おさしづ改修版』第3巻(明治26～28年)の、飯降伊蔵本席に関連する伺いの「おさしづ」における「道」の用例を整理する。本席に関連する「おさしづ」は69件あり、「道」という言葉は35件で用いられる。そのうち17件では、1件の「おさしづ」のなかで3回以上の用例がある。第3巻の本席に関する「おさしづ」としては、おもに、本席の身上伺いと本席宅に関するものがあるが、「道」が多く用いられる「おさしづ」はほとんどが身上伺いである。以下、引用するものはすべて本席の身上を台とした「おさしづ」である。

本席身上伺いの「おさしづ」の意義は次の言葉に端的に示されている。

「これまで道という、今の道という。事情変わりと。知らずへ通り来た。分からずへ通りたる。身上に障りて論しに出た。」(さ26・10・19)

「これまで(の)道」、すなわち、教祖がお連れ通り下さった歩みと、「今の道」の歩みとは、何か変わってしまったところ、それを知らず分からず通っている。そこで、本席の身上に障りをつけて論しに出たと言われる。ここでの「道」は、特定の個人についてというよりは、教会本部の歩みについて説かれている。そして、これから先の「道」を歩むために、これまでの「道」をふり返り、「道の理」を心に治めるよう論される。

### 道に肥をせにやならん

第1巻、第2巻では「世界の道」と「神の道」という二通りの「道」を対比して、「神の道」すなわち教祖によって教えられた「道」を通るよう明確に説き分けられているが、第3巻ではそうした用例はみられない。どちらかという、「道」がある程度自明のものとして説かれることが多い。

「天然自然の理によって始め掛けたる処、又遠く始め掛けたる道に肥が要るへ。どういふもの肥がするなら、どんな作も取れる。何処から何処まで一時に作る。成らん事せいは言わん。いかなるも道に肥せにやならん。」(さ26・7・12)

この「道」は、立教以来、教祖が身をもって通って示された「ひながたの道」である。ここでは、それを作物に例えて、「道に肥(を)せにやならん」と、大事に育てることの必要性を説かれている。同じ「おさしづ」ではそれに続いて、「これからの道」について次のように言われている。

「これからの道危なきの道もあれば頼もしい道もある。危なき道よう堪忍して。この道は難しい事は要らん。堪忍はこの道を始め掛けたると言う。よう尋ねて始め掛けてくれた。堪忍互い結ぶなら、あらへ道の。堪忍というは誠一つの理、天の理と論し置く。……心に堪忍戴いて通れば晴天同様、一つ道と論し置く。」(同上)

この言葉は「三年後の教祖十年祭には教勢は著しく伸展した。これは頼もしい道。十年祭直後、内務省訓令が発令され、急転直下、危なき道となる」ということを予め示されたものとされる(渡部与次郎『おさしづ一日一言』道友社、1989年、278～279頁、金子圭助解説)。このように言われるが、教勢の飛躍的な伸展にともない、社会の干渉や反対攻撃も強まっていた。特に「危なき道」

を通るにあたって「堪忍」が繰り返し強調されている。「堪え忍ぶ」ということであるが、単純に我慢せよというのではなく、ここでは「道に肥」をする生き方が、「堪忍」することであると教えられている。教祖が教えられた「ひながたの道」にそって生きるなら、「心に堪忍戴いて通れば晴天同様」と論されている。

### 道の理踏み被り無きよう

当時の天理教は燎原の火に例えられるほど、教勢が伸び広まった。しかし、「おさしづ」では、そのことを喜ばれるよりも、現状に対して戒められるような言葉のほうが多い。

「一人から治まりたる処よう聞き分け。訳も分からん処から、この道元々破れ道、細き道忘れて、今日成りたる道ばかり見るから分からん。」(さ28・4・17)

「今日成りたる道」は、かなり盛大になっている。しかし、その盛大になった「道」ばかり見ては、「この道」は分からんと言われる。「この道」は教祖一人から始まったのであり、先でどうなるかも分からないなか、容易でない「道」を通ってきたのである。その元を忘れてはならないと論される。

また、「道の理」を踏み外すことのないようにと論される。

「どんと心を治めてくれ。道の理踏み被り無きよう、世上に理を下ろしたる。理を聞き分け。治まる治まらんというは心から。よう聞き分け。文字も分からぬ者でも、道に使う理を聞き分け。所には名称下ろしたる。そもへから治まらん。一つの芯が元である。芯が狂うから、間違う。間違うから治まらん。二度三度運ぶ理を聞き分け。元という、ぢばというは、世界もう一つと無いもの、思えば思う程深き理。古いもの埋れてあるというは、よう聞き分け。」(さ28・10・11)

「世上に理を下ろしたる」とは、神道天理教会が設置されていることを指している。それが治まるのも治まらないのも心からである、ということを知り分けてもらいたい。「文字も分からぬ者でも、道に使う理を聞き分け」と、何はさておいても「道に使う理」を心に治めるように論される。そうでなければ、各地に名称の理が許されてはいるものの、「そもへから治まらん」と言われる。

「道に使う理」とは何かについては、「元という、ぢばというは、世界もう一つと無いもの、思えば思う程深き理」と言われる。ぢばは、人間世界の元であり、教祖が存命でおはたらき下される場所であり、たすけの元である。この元こそが「この道」において最も重要なものである。それを踏み外しては教会本部も各教会も治まらんと説かれる。

以上、第3巻の本席に関する「おさしづ」において特徴的な例をあげた。「道に肥せにやならん」とか「道の理踏み被り無きよう」「道に使う理を聞き分け」などということが言われているが、そこで伝えようとする事柄は一貫している。それは、「この道」の元をしっかりと尋ねるということである。どんどんと教勢が大きく伸展するにもなって、社会の干渉や反対攻撃も強まっていた。そのなかにあつて、今一度、「この道」の元、教祖の教えにそって日々を歩むよう論されている。